福童町遺跡 14

－福岡県小郡市福童所在遺跡の調査報告－

小郡市文化財調査報告書第 315 集

２０１８

小郡市教育委員会

＜序　文＞

小郡市は、北部・中南部における宅地開発や北東・中南部における工業団地の開発が相次いで行われ、現在福岡・久留米両市のベットタウンとして日々発展を続けています。これに伴い、交通網の整備も着々と進行しつつあります。

今回ここに報告いたします「福童町遺跡14」は、小郡・西福童3081・3086号線整備事業に先だって小郡市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書です。遺跡は、三国丘陵から延びる洪積台地の縁辺部に築かれており、近年盛んに開発が行われている西福童区に位置します。西福童区は、古くは縄文時代から今回報告いたします近現代まで連綿と人々の生活の痕跡が見つかる地域です。今回得られた成果が、小郡市内における歴史を復元する一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査にご理解とご協力をいただいた周辺住民の皆様、現地作業にあたった地元作業員の皆様など、発掘調査を進める際にお世話になった多くの方々に深く感謝を申し上げ、序文といたします。

平成30年3月30日

小郡市教育委員会

教育長　清武　輝

＜例　言＞

1、本書は、小郡・西福童 3081・3086 号線道路整備事業に伴い、小郡市教育委員会が平成 28 年度に小郡市福童地内において行った福童町遺跡 14 の埋蔵文化財発掘調査の記録である。調査及び報告書を刊行するための整理作業は、小郡市教育委員会文化財課が小郡市都市建設部まちづくり推進課から委託を受けて実施した。

2、遺構の実測、遺構の写真撮影は西江幸子が実施した。

3、遺物の実測は西江、製図は久住愛子、洗浄・復元には、佐々木智子、山川清日、永富加奈子、牛原真弓ら諸氏に多大なる協力を得た。また、遺物の写真撮影は西江が行った。

4、遺構図中の方位は座標北を示し、図上の座標は国土座標第Ⅱ系（世界測地系）に則している。

5、本書で用いた標高は、東京湾平均海水面（T．P．）を基準としている。

6、本書で用いている略号は以下のとおりである。

溝：SD　　ピット：P

7、遺物・実測図・写真は小郡市埋蔵文化財調査センターにて管理・保管している。

8、本書の執筆・編集は西江が担当した。

本文目次

第１章　調査の経過と組織・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
　　１．調査の経緯
　　２．調査の経過
　　３．調査の体制
第２章　位置と環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
第３章　遺跡の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
第４章　遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
　　１．溝
　　２．畝溝群
　　３．ピット・包含層
第５章　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
　　１．福童町遺跡 14 の評価

挿図目次

第１図　福童町遺跡 14 調査地位置図（S＝1/5,000）
第２図　福童町遺跡 14 周辺遺跡分布図（S＝1/25,000）
第３図　福童町遺跡 14 遺構配置図（全体図：S＝1/120、土層図：S＝1/80）
第４図　包含層出土遺物実測図（S＝1/4）
第５図　福童町遺跡 14 の遺構（S＝1/300）
第６図　小郡市内で発見された近世以降の蔵骨器（S＝1/4）

図版目次

図版１　①西側調査区全景（西側から）
　　　　②東側調査区全景（東側から）
図版２　①東側調査区東壁土層（西側から）
　　　　②西側調査区南壁土層（北側から）
　　　　③２号溝完掘（北側から）
　　　　④西側調査区畝溝群中央部付近（北側から）
　　　　⑤西側調査区畝溝群西側付近（北側から）
　　　　⑥出土遺物

表目次

福童町遺跡 14 出土遺物観察表

第１章　調査の経過と組織

１．調査の経緯

福童町遺跡 14 の発掘調査は、小郡市福童 352-4、353-8、353-7 が「小郡・西福童 3081・3086 号線道路改良工事」の対象地となり、平成 22 年７月 12 日小郡市役所都市建設部まちづくり推進課より埋蔵文化財の有無に関する照会（事前審査番号：0038 号）が提出されたことに始まる。市教委では、これを受けて平成 22 年８月９日に申請地の試掘調査を行った結果、地表下約 45 ～ 80 ㎝の深さで遺構が確認されたことから、開発に先立って埋蔵文化財に関する協議を行った。その後、平成 28 年度に上記対象地の 255.04 ㎡について発掘調査を実施することとなった。調査費用に関しては、小郡市役所都市建設部まちづくり推進課より小郡市教育委員会文化財課が予算の執行委任を受けた。

２．調査の経過

発掘調査は平成 28 年８月 30 日から同年９月 28 日にかけて実施した。調査の主な経過は以下のとおりである。

８月 30 日　西側表土剥ぎ開始。
９月　２日　西側発掘作業員を投入し、遺構検出・掘削開始。
９月　８日　西側全景写真撮影。
９月 13 日　西側埋戻し。東側表土剥ぎ開始。
９月 15 日　東側発掘作業員を投入し、遺構検出・掘削開始。
９月 21 日　東側全景写真撮影。
９月 27 日　東側埋戻し。
９月 28 日　現場引き渡し、調査完了。
以後、図面・遺物整理作業及び報告書作成実施。

３．調査の体制

福童町遺跡 14 の調査の体制は、以下のとおりである。

〔平成 28 年度〕

小郡市役所都市建設部
　都市建設部長　肥山　和之
　まちづくり推進課長　松井　秀章
　施設・公園係長　諸冨　和彦

小郡市教育委員会
　教育長　清武　輝
　教育部長　山下　博文
　文化財課長　片岡　宏二
　　係長　柏原　孝俊
　　技師　西江　幸子（調査担当）

〔平成 29 年度〕

小郡市役所都市建設部
　都市建設部長　肥山　和之
　まちづくり推進課長　松井　秀章
　施設・公園係長　諸冨　和彦

小郡市教育委員会
　教育長　清武　輝
　教育部長　山下　博文
　文化財課長　柏原　孝俊
　　係長　杉本　岳史
　　技師　西江　幸子（整理担当）

〔発掘作業従事者〕

木村哲郎、串尾弥代子、小宮都賀最、西原啓介、早坂幸子（敬称略）

第２章　位置と環境

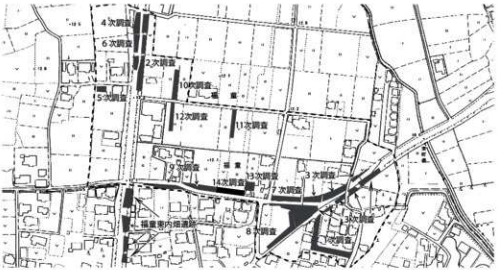
小郡市は、中央部を南北に宝満川が流れ、北西部に通称三国丘陵、北東部に花立山（標高 130.6 m）から延びる丘陵があり、南側は緩やかに下る平坦な台地へ移行し、筑後平野へと続く。

福童町遺跡 14（１）は、小郡市の南部、宝満川と秋光川とに挟まれた洪積台地の縁辺部に位置する。遺構検出面での標高は 11.8 m前後を測る。遺跡周辺は、現状では平坦な土地であるが、遺構検出面では調査区東側に向かうにつれ標高が高くなっていた。このような状況は、本調査区西隣で実施した９次調査区（市報告 265 集）でも確認できている。

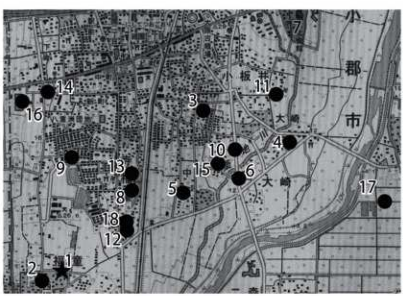
福童町遺跡は、平成 16 年度以降 13 回の調査が実施されている。遺構は検出されていないが、縄文時代の遺物を４次調査区（市報告 226 集）、弥生時代の遺物を４・８次調査区（市報告 240 集）で発見しており、この頃から人々の生活が営まれていたと想定できる。その後、古墳時代後期の集落跡が１（市報告 203 集）・３（市報告 225 集）・８次調査区で、中世の建物群や区画溝が２（市報告 207 集）・３・４・９次調査区で、近世以降は畝溝群が３次調査区、鍋や碗等が大量に出土した福童東内畑遺跡（２：市報告 226 集）、大溝が２・９・10 次調査区（市報告 282 集）、溝が 11（市報告 293 集）・12（市報告 303 集）次調査区、墓域が９次調査区で発見されており、連絡と遺構・遺物が検出されている。なお、福童町遺跡各調査地は第１図を参照されたい。以下では、福童町遺跡周辺の遺跡の概要を整理し、本遺跡の歴史的環境をまとめる。

小郡市南部において最初に人々の活動が遺構を伴って確認されたのは、大崎井牟田遺跡（３：市報告 55 集）の縄文時代の押型文土器を伴って検出された集石炉である。弥生時代になると川沿いの微高地上に集落が築かれる傾向が強くなり、大崎遺跡（４：市報告 175 集）、大崎後原遺跡１・２（５：市報告 247 集・256 集）、大崎中ノ前遺跡１・２（６：市報告 116 集・123 集）で小郡・大板井遺跡群（７）から派生したと考えられる集落が築かれている。これらの遺跡の西側では、寺福童遺跡４（８：市報告 221 集）で中期の中広形銅戈９本が埋納された状態で確認され、寺福童遺跡５（９：市報告 208 集）で柳葉式磨製石鏃を伴う前期の木棺墓や中期を主体とする甕棺墓群などの墓域を中心に遺跡が確認されており、非常に活発な人々の活動が窺える。弥生時代終末から古墳時代初頭になると、大崎小園遺跡１・３（10：市報告 24 集・136 集）で庄内式系土器・古留式系土器といった外来系土器が多数出土し、小板井屋敷遺跡５（11：市報告 278 集）で朝鮮半島系土器や仿製鏡を含む住居群が築かれ、寺福童遺跡１（12：市報告 114 集）で方形周溝墓４基が確認されるなど、外来的な要素が多々見られる。古墳時代後期になると、大崎小園遺跡１・２・３で再び住居群が築かれ、福童町遺跡でも１次調査で集落跡が確認されており、人々の活発な活動が想定される。古代になると、福童町遺跡周辺では、寺福童遺跡３（13：市報告 196 集）において小郡官衙の周辺集落と考えられる集落域が検出されている以外は、明確な遺構は確認されていない状況である。中世になると、館を区切ると思われる大溝が市内各所で確認されている。近隣では、小郡堂の前遺跡２（14：市報告 314 集）、大崎小園遺跡、大崎東柿添遺跡（15：市報告 116 集）が挙がるが、最も代表的なのは福童山の上遺跡（16：市報告 100 集・114 集・170 集・171 集）で発見された区画溝や水田に利用されたと考えられる多数の溝であろう。また、宝満川東側では宝満川を利用した港である稲吉元矢次遺跡（17：市報告 45 集）がある。この遺跡を中心とした街形成の検討を大溝等土地利用と併せて精査することで、当時の人々の生活の復原へとつながると考えられる。一方で、1359 年（正平 14 年・延文４年）の大保原合戦では、南朝の菊池勢と北朝の少弐勢が激突した地として、関連資料に「福童」の字が見られる。現在は、寺福童で福童原古戦場碑（18）が確認されているのみであるが、今後の調査の進展で関連資料が見つかる可能性も考えられる。近世になると、福童東内畑遺跡で井戸や溝など当時の集落域が確認されている。市内では、近世における調査事例が少なく、近年では三国小学校遺跡５（市報告 311 集）で鍛冶炉跡を検出したほかは、区画溝を検出しているのみであり、今後の調査事例の増加が待たれるところである。

以上より、福童町遺跡周辺は連綿と人々の活動の痕跡が積み重なってきた地域であり、個々の事象を精査し歴史的な位置付けを行うことがより一層求められていると言えよう。



第１図　福童町遺跡 14 調査地位置図（S＝1/5,000）



第２図　福童町遺跡 14 周辺遺跡分布図（S＝1/25,000））

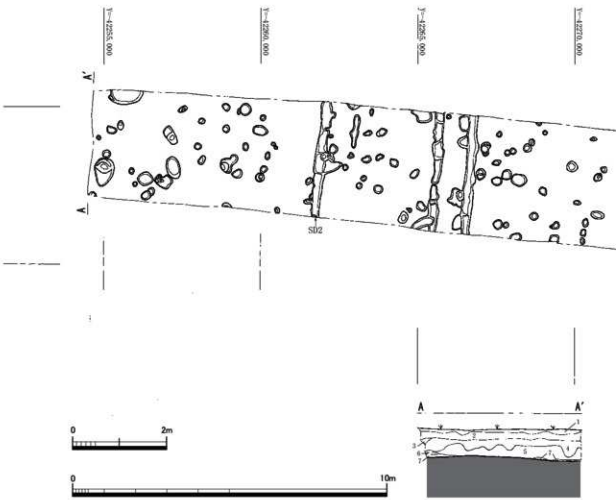
第3章　遺跡の概要

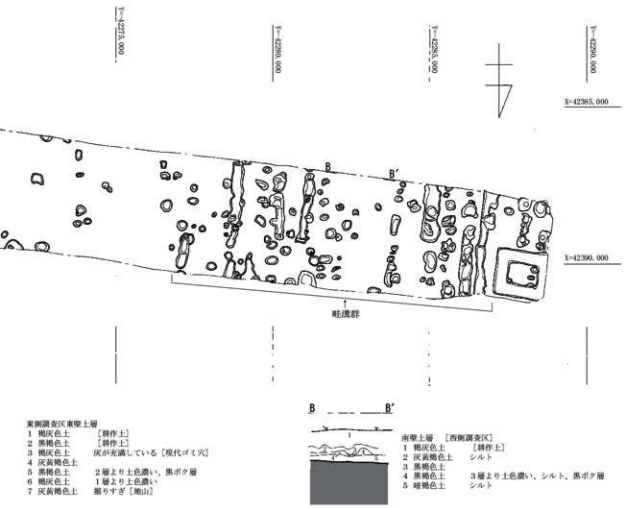
福童町遺跡 14 は、周知の埋蔵文化財包蔵地の南端中央部に位置し、宝満川と秋光川によって形成された低い丘陵の上に位置する。道路改良工事部分のみの発掘調査であったため、南北約 3.6 m、東西約 34.5 m の非常に狭小な範囲である。遺構検出面の標高は 11.8 m 前後、現地表面から約 70 cm 下る高さで確認している。層位は、地表面より褐灰色土の耕作土が堆積し、その下より黒褐色～暗褐色土が堆積し、さらにその下より遺構検出面であるにぶい黄褐色ローム層や灰黄褐色土を検出した。

遺構は、南北方向に延びる近世以降と考えられる畑の畝を数条検出した他は、多数のピットを確認した。検出したピットからは、建物を想定できるような配列は見い出せていない。畦や一部のピットより土器の小片を１～２点発見したほかは、遺物の出土はほとんどなかった。

福童町遺跡 14 で検出した遺構・遺物は以下のとおりである。

●遺構：溝１条、畝溝状遺構、ピット　　●遺物：土師器


Y=42255.000
Y=42260.000
Y=42265.000
Y=42270.000
A'
A
SD2
0
2m
0
10m
A
A'



第3図　福童町遺跡14遺構配置図（全体図：S＝1/120、土層図：S＝1/80）

第４章　遺構と遺物

１．溝

２号溝（第３図、図版２）

調査区の東側に位置し、南北方向へと延びる。現状で全長約 3.7 m、途中ピットに切られてはいるが、幅約 30 ㎝、深さ最大約９㎝を測り、断面形状は逆台形を呈する。埋土は単層であった。調査区内で検出した南北方向に延びる遺構の中では、溝底部での凹凸が少なく、２号溝周辺では同様な遺構がなかったことから、畝溝状遺構ではなく溝として捉えることとした。

埋土からは、土師器の皿の破片と磁器の皿の破片を発見したが、小片の為、図化するに至らなかった。

２．畦溝群（第３図、図版２）

調査区西側を中心に検出した南北方向の畝溝群である。畝溝はおよそ 25 ～ 60 ㎝の幅を持ち、畝溝内は凹凸があり、掘削の状況をよく遺している。削平を受けて、ピット状にしか確認できない部分も存在する。

埋土からは、土師器の破片を数点発見したが、小片の為、図化するに至らなかった。

３．ピット・包含層

ピット（第３図）

調査区全域においてピットを確認した。そのうち遺物が出土したピットは８基存在する。Ｐ１より弥生土器片が、Ｐ４から白磁片が、その他のピットからは土師器片が出土した。残念ながらいずれも小片の為、図化するには至らなかった。

包含層（第３図）

本調査地において遺構から出土した遺物は少なかったことから、包含層において出土した遺物についても併せて記すこととする。包含層から出土した遺物は少ないものの、調査区中央部付近より古墳時代に比定できる土師器の高坏坏部片が１点出土した。また、調査区北西隅に植えられていた木の切り株付近からは、土師器の完形の壺１点が出土した。

出土遺物（第４図、図版２）

１は土師器の壺である。口縁部は直立的に伸び、内面をヘラ削りすることで端面を形成している。外面は底部から胴部上位までをヘラ削りで成形し、胴部上位から口縁部にかけて回転ナデを施している。内面は頸部から底部にかけて回転ナデを施している。底部は糸切りにより成形されている。この壺は、福童町遺跡９の１号土坑で出土した壺や、三沢北中尾遺跡５ａ地点出土の蔵骨器と類似している。どちらも墓域内で出土しており、今回出土した壺も現代墓が築かれていた付近から出土していることから、蔵骨器として使用された可能性が想定されよう。

第４図　包含層出土遺物実測図
（S = 1/4）

第5章　まとめ

1．福童町遺跡 14 の評価

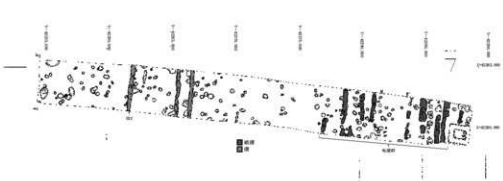
今回の調査では、遺構の残存状況が悪く、遺物出土量も少なかったことから、各遺構に対し性格付けを行うことは困難を極めた。しかし、本調査地の評価付けを行なう上でポイントとなる事象が２点ある。以下では、これらについて整理を行うことで、本調査地の遺跡評価としたい。

まず１点目は、調査区西側を中心に検出した畝溝群である。土師器片を中心に数点発見していることから、少なくとも近世において畑としての耕作利用が行われていたことが想定できよう。では、近隣にも畑としての耕作利用の痕跡がこれまでに発見されていたのであろうか。本調査地周辺におけるこれまでの調査成果をみると、本調査地より約 1.2 ～ 1.6 ㎞の地点で実施された福童町遺跡３次調査において、近世畑畝溝遺構が検出されている。この３次調査の西隣で実施された７次調査では畝溝遺構が検出されていないことから、東西方向の畝溝群は、少なくとも３次調査で発見された東西範囲の幅で土地利用がなされていることが判明している。本調査地で発見された畝溝遺構は南北方向であることから、福童町遺跡の包蔵地内における近世の新たな畝溝群として位置づけられよう。この畝溝群は、本調査地の西側に隣接する９次調査では検出されておらず、また、本調査地の中央部から東側では検出できなかったことから、少なくとも東西方向では限られた幅で畑としての耕作利用がなされていたと言えよう。

２点目は、今回の調査において包含層内で発見した土師器の壺である。第４章遺構と遺物に記したように、同様の土器が三沢北中尾遺跡５a 地点と福童町遺跡９次調査で出土しており、蔵骨器とされている。よって、これらの蔵骨器について各遺跡での遺構状況や遺物の特徴等を下記で簡略にまとめたい。

まず、福童町遺跡９次調査の１号土坑で発見された壺についてまとめたい。１号土坑は、福童町遺跡９次調査において調査区の東側を中心に形成されていた近現代墓地群の一角で発見した土坑である。当初は、この墓域で検出した土壙墓とは深さも大きさも異なり、また、６号土壙墓を切っていたことから土坑として遺構評価を行った。その後、様々な機会に近世・近現代土壙墓に関する調査報告書に触れることで研鑽を積み、この１号土坑は土壙墓として遺構評価を行えるものと考えるに至った。これにより、１号土坑で発見した土師器の壺は、蔵骨器として捉えるより大きな根拠を得たと言えよう。

では、なぜこの１号土坑を土壙墓と評価するに至ったのかというと、三沢北中尾遺跡５a・５c 地点で検出された近世墓地の様相を精査することで、その根拠を得たことが大きい。三沢北中尾遺跡５a・５c 地点では、丘陵の最高位からやや南に下った平坦地に近世墓地が営まれていた。墓石が自立した状況で残存していたものが 20 基程度、その後表土剥ぎを行った後の遺構検出時で 300 基程度の近世墓の掘り込みが確認されている。それらを精査すると大きく２通りがあることが指摘されており、１つ目は大型の甕に入れて土葬するもので、掘り込みは一辺１m程度の区画、２つ目は火葬人骨を蔵骨器に収めて埋葬するもので、掘り込みは小型の区画に区別できるとされている。これらの状況を福童町遺跡９次調査の近現代の墓域に当てはめて考察すると、１号土坑は掘り込みは小型の区画であり、三沢北中尾遺跡５a 地点で出土した蔵骨器と類似することから、上記のような結論に至ったのである。



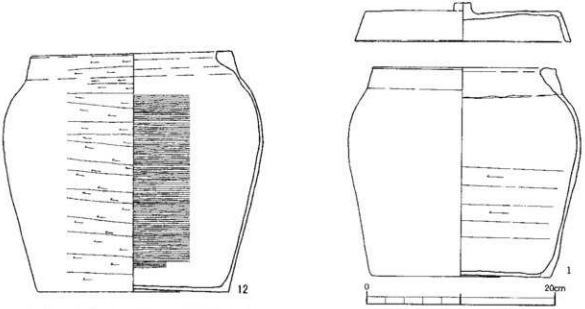
第５図　福童町遺跡 14 の遺構（S = 1/300）

次に、これら３遺跡で発見した蔵骨器について比較検討を行いたい。まず、これら３点は伴に土師器であり、やや直立気味に立ち上がる口縁部に胴部が上位で若干膨らみ、口径よりやや狭い底径をなす胴張りの弱い形態を呈し、底部はやや上げ底である。福童町遺跡９次調査と三沢北中尾遺跡５a 地点出土のものは、伴に口縁部を内側に逆三角形状に肥厚するが、福童町遺跡 14 次調査出土のものは、一定の厚みで直立に延びる点で異なる。また、形を成形する調整では、福童町遺跡９次調査出土のものは、外面がヘラ削り、内面が粗めの工具による回転ナデを中心にして調整を施し、福童町遺跡 14 次調査出土のものは、外面胴部から底部にかけてヘラ削り、胴部から口縁部にかけて回転ナデ、内部口縁部はヘラ削り、頸部から底部は回転ナデを中心に調整を施しており、外面の調整において類似点が見られる。一方で、三沢北中尾遺跡５a 地点出土のものは、外面が磨滅しているものの、内面がヘラ削りを中心にして調整を施している点で他の２点と異なる。また、三沢北中尾遺跡５a 地点出土のものは、蓋も併せて出土していることから、本来は福童町遺跡９次調査・14 次調査のものも蓋があったと考えられる。

小郡市内における近世以降の墓域の調査は、これまで横隈十三塚遺跡２（市報告 153 集）、三沢北中尾遺跡５a 地点（市報告 204 集）、福童町遺跡９（市報告 265 集）の３遺跡のみであり、その中で実際に土壙墓を掘削し、遺構状況を確認した遺跡は福童町遺跡９のみである。今回の調査地では、墓域は発見されなかったものの、近世以降の墓域に伴う遺物が出土しており、今後の調査への一助となり得るであろう。

なお、福童町遺跡の包蔵地におけるこれまでの発掘調査成果について地図上に遺構配置を整理したものが、福童町遺跡 13（市報告 310 集）の報告書に掲載されているので、参考にしていただきたい。

≪参考文献≫
柏原孝俊 2001『横隈十三塚遺跡２』小郡市文化財調査報告書第 153 集　小郡市教育委員会
片岡宏二・杉本岳史・山崎頼人 2005『三沢北中尾遺跡５地点』小郡市文化財調査報告書第 204 集　小郡市教育委員会
西江幸子 2012『福童町遺跡９』小郡市文化財調査報告書第 265 集　小郡市教育委員会
上田恵 2017『埋蔵文化財調査報告書９』小郡市文化財調査報告書第 310 集　小郡市教育委員会



福童町遺跡９次調査　１号土坑出土　　三沢北中尾遺跡５a 地点出土

第６図　小郡市内で発見された近世以降の蔵骨器（S＝1/ 4）

①西側調査区全景（西側から）

②東側調査区全景（東側から）

図版２

①東側調査区東壁土層（西側から）

②西側調査区南壁土層（北側から）

④西側調査区畝溝群中央部付近（北側から）

③２号溝完掘（北側から）

⑤西側調査区畝溝群西側付近（北側から）

⑥出土遺物

出土遺物観察表

1. 土器

法量＝口：口径、底：底径、高：器高　器種＝土：土師器

掲図番号	図版番号	出土遺構	器種	法量cm	色調	胎土	焼成	調整	残存率	備考
4-1	2-6	北西側包含層	土-壺	口:12.0 底:11.6 高:11.35	外:にぶい橙(7.5YR6/4) 内:橙(7.5YR7/6)	1mm以下の細砂をやや多く含む	良	外:回転ナデ、ヘラ削り 内:ヘラ削り、回転ナデ	完形	底面外面は糸切り。

	報告書抄録
ふりがな	ふくどうまちいせき
書名	福童町遺跡 14
副書名	福岡県小郡市福童所在遺跡の調査報告
巻次	
シリーズ名	小郡市文化財調査報告書
シリーズ番号	第 315 集
編著者名	西江　幸子
編集機関	小郡市教育委員会
所在位置	〒838-0198　福岡県小郡市小郡 255－1　℡0942－72－2111
発行年月日	平成 30 年 3 月 30 日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
福童町（ふくどうまち）遺跡14（いせき）	福岡県（ふくおかけん）小郡市（おごおりし）福童（ふくどう）	40216		33°22′53″	130°32′44″	2016. 8. 30 ～ 2016. 9. 28	129. 2 ㎡	道路拡張工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
福童町遺跡 14	集落	中世 近世 近代	溝 畦畔 ピット	土師器	

要約

今回の調査では、調査区が狭小であり、遺物出土量も少なかったが、近世以降に相当すると考えられる畝溝状遺構を検出した。近世の畝溝状遺構は福童町遺跡 3 次調査でも検出されていることから、当時、調査地付近は畑としての土地利用がなされていたと考えられる。

また、小郡市内では調査事例の少ない近世以降の墓域に伴うと考えられる遺物も出土しており、今後の近世以降の墓域を検討する上で貴重な事例となった。

福童町遺跡 14

小郡市埋蔵文化財調査報告書第 315 集

平成 30 年 3 月 30 日

編集　小郡市教育委員会

福岡県小郡市小郡 255－1

印刷　株式会社　四ヶ所

福岡県朝倉市馬田336

福童町遺跡14

小郡市文化財調査報告書第３１５集

２０１８　小郡市教育委員会